

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12835

研究課題名（和文）ネオプラグマティズムのヘーゲル理解を通じた近代日本哲学の行為論的解釈の試み

研究課題名（英文）Interpretation of Modern Japanese Philosophy through a Hegelian Understanding of Neo-Pragmatism

研究代表者

竹花 洋佑（Takehana, Yosuke）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：60549533

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本哲学の代表的哲学者である西田幾多郎と田辺元の論理の意味を、ネオ・プラグマティズムのヘーゲル理解を介して問い直すことを試みる本研究は、田辺元のヘーゲル判断論の解釈を中心として行われた。具体的には、『ヘーゲル哲学と弁証法』（1932年）に収められた論文「ヘーゲル判断論の理解」を詳細に解釈することによって、田辺の判断論理解が、判断の社会性を基礎とするものであることを、ヘーゲルの『論理学』『概念論』の読解をふまえて明らかにし、それがブランダムに代表されるヘーゲル理解と親和性を持つことを明らかにした。また、田辺の判断論理解がその後展開される「種の論理」とも内面的つながりをもつことを捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで西田幾多郎や田辺元の議論は大陸系の哲学の伝統との関係で論じられることが多かった。確かに、今日の哲学の世界的主流と言える分析哲学の明快さやスタイルとは大きく異なるし、またそれが依拠している哲学的伝統と西田・田辺が依拠しているものとはかなりのズレがある。しかし、分析哲学の中からヘーゲルリバイバルが起きることで、ヘーゲルに大きく依拠した西田・田辺にいわば分析哲学の方から歩み寄る動きが生じた。本研究は、こうした動向を捉え、そして分析哲学の議論と西田・田辺の議論とが一定程度の親和性を持つことを明らかにした。こうした研究は今後の日本哲学研究にそれなりのインパクトをもたらすものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study, which attempts to question the meaning of the logic of Kitaro Nishida and Hajime Tanabe, two leading philosophers of modern Japanese philosophy, through the Hegelian understanding of neo-pragmatism, focuses on the interpretation of Tanabe's Hegelian theory of judgment. Specifically, by interpreting in detail the article "Understanding Hegel's Theory of Judgment" included in "Hegelian Philosophy and Dialectics" (1932), we clarified that Tanabe's understanding of judgment theory is based on the social nature of judgment and that it has affinity with the understanding represented by Brandham. In addition, we captured the fact that Tanabe's understanding of judgment has an internal connection with the "logic of species," which was subsequently developed.

研究分野：哲学 日本哲学

キーワード：西田幾多郎 田辺元 ヘーゲル ネオ・プラグマティズム ブランダム セラーズ 判断論

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景には、西洋における「分析哲学」と「大陸哲学」との対話という動きと日本における日本哲学研究の「大陸哲学」的偏りという状況がある。西洋の哲学界は長い間、一切を言語の分析へと還元しようとするイギリス・アメリカの「分析哲学」と、言語の届かない領域を特異な術語で語ろうとするフランス・ドイツの「大陸哲学」とに分断され、相互に哲学的対話が成り立たない状態が続いてきた。しかし、こうした対立はここ数十年の間で徐々に解消されようとしている。ローティやハーバースの仕事がその例である。ところが、日本では二つの伝統への分断は固定されたままである。一方の伝統に立つ研究者は他方の伝統に目を向けようとしない。現在の日本哲学の研究もこうした状況を反映している。もちろん、日本哲学を一つの学問的な専門領域へ引き上げたこれまでの研究が主に「大陸哲学」の伝統に属する研究者によって担われてきたことは否めない。しかし、日本哲学が海外において益々注目されている現在の状況を考えるならば、日本哲学研究は異質な伝統との積極的な対話を進めていくべきであると考えられる。

2. 研究の目的

近年注目を集めているネオ・プラグマティストによるヘーゲル理解と西田・田辺のヘーゲル理解とを比較検討し、そのことを介して「分析哲学」の伝統と「京都学派」の思想を関連づけることによって、西田・田辺の「論理」の意味を測定することが本研究の目的となる。

上でも述べたように、これまで近代日本哲学研究はいわゆる「大陸哲学」系の研究者によって担われてきた。しかし、近年の英米圏でのネオ・プラグマティストによるヘーゲル再評価の機運は「京都学派」と「分析哲学」の伝統を結びつける決定的な糸口となる。なぜなら、他ならぬヘーゲルこそ近代日本哲学を代表する哲学者である西田幾多郎と田辺元がその思想形成において大きな影響を受けた哲学者だからである。したがって、西田と田辺における論理の意味を、ブランダムやマクダウェル、さらにはローティらのヘーゲル理解との関係において捉えることにより、「分析哲学」と日本哲学の伝統の間に相互交流の場が開かれることになると考えた。

「京都学派」の哲学者、とりわけその第一世代に属する西田と田辺は論理に強いこだわりを持っている。哲学は論理的に展開されなければならないというのが彼らの確信であった。しかし、そもそもその論理がいかなる意義を有しているのかはこれまで積極的に解明されてきたとは言えない。もちろん「場所の論理」(西田)にしても「種の論理」(田辺)にしても、その内在的な研究は多くなされてきた。しかしそれらが「〇〇における論理」という限定抜きに論理そのものとしていかなる意味を持ちうるのかという点は明らかになってはいない。矛盾を論理の本質要件とし、しかもそれを論理の行為における生成という観点から考える彼らの発想が、「分析哲学」の立場から見てどのような可能性を持つのかということをはっきりとすることは、もっぱら「大陸哲学」の伝統に依拠してきた日本哲学研究にとっても、それまでの言語に加えてそれをを用いる行為・実践をもその立脚点としつつある「分析哲学」の流れにとっても極めて大きな意義をもつと言える。

3. 研究の方法

本研究は以下の二点に留意しながら遂行される。

(a) 概念の本性をめぐる問題に特化した研究であること。概念とは素材としてあらかじめ存在している対象に意味を付与するものだという発想をヘーゲルは厳しく批判する。ヘーゲルによれば、概念の外に裸の実在は存在せず、概念の自己限定の運動そのものがリアリティの源泉と見なされる。こうしたヘーゲルの思想をどのように捉えるかということが西田と田辺のヘーゲル理解の中心に位置していた。ブランダムへのヘーゲル解釈の焦点も、セラーズの「所与の神話」批判を受け継いだマクダウェルの立場も、こうした概念の問題が中心となる。問題の焦点は概念の本性をめぐる問いに絞られている。したがって、比較研究が陥りがちな議論の焦点の曖昧化という問題には本研究は陥らない。

(b) 論理の生成を社会的実践という観点から明らかにする研究であること。本研究は出来上がった論理の形式が、現代の論理学の立場から見て許容できるか否かを検討するものではない。本研究は、西田・田辺のヘーゲル解釈を共に論理が論理として立ち現れてくる場面を捉えようとしたものとして理解する。しかも、そうした論理の生成が行為の問題として理解されている。西田の「行為的直観」や田辺の「種の論理」はまさにそのような思想に他ならないし、概念を社会的な仕方で使用することがその意味を規定するというのがブランダムのプラグマティズムの立場である。

具体的な研究の方向は以下の通りである。

ヘーゲルを介して、ネオ・プラグマティズムと西田・田辺哲学とを並べて検討する際の足がかりとなるのは、ブランダムと田辺との比較である。なぜなら、両者共にヘーゲルの概念が推論へ

と展開する点に注目し(ブランダムは推論主義を標榜しており、田辺の「種の論理」が推論的構造をもつ)さらにそれが社会的実践を基礎に理解されるからである。まずは研究の基礎的作業として、ブランダムのテキストの綿密な読解が必要となる。ブランダムのヘーゲル論は、Tales of the Mighty Dead (2002)の第6・7章で展開されているが、その意味を理解するためには、800頁近い大著 Making it explicit(1994)をはじめとした他の著作を精読する必要がある。同時に、田辺のヘーゲル概念論理解が社会的実践という観点からなされていることを明らかにする研究を行い、その成果を発表する。申請者のこれまでの研究によって、ヘーゲルおよび田辺のテキスト読解は十分になされているが、ブランダムの議論とつなげるためには、田辺のヘーゲル理解をヘーゲルの研究史のなかに位置付けることがさらに必要となる。田辺の基本的発想は、ヘーゲル 概念-判断-推論 の構造を『法の哲学』の議論に結びつけるというものであるが、この妥当性をドイツのヘーゲル研究および英米圏で大きな影響力を持つピピンによる研究との関係から探っていく。

西田哲学とネオ・プラグマティズムの議論を付き合い合わせる研究においては、西田とプラグマティズムとの比較研究と「行為的直観」の論理的意味の解明の二つが軸となる。ジェイムズからの影響がよく知られているように、西田哲学はそもそもプラグマティズム とのつながりが深い。ネオ・プラグマティズムと西田のヘーゲル評価をプラグマティズムの思想に立ち返って理解することを目指す。また、西田のヘーゲル理解の基礎にある「行為的直観」は、社会的実践という問題を含みつつも、制作行為をモデルに考えられている。したがって、西田の議論を検討することによって、論理的であることの意味がブランダムの概念の社会的実践における使用とは異なっていたかたちで浮かび上がることになる。

以上の研究をふまえて、西田・田辺哲学における論理的なものの本性を捉える。それまでの研究によって、西田・田辺の立場の独自性も明らかになっている。それはブランダムの合理主義に対して、両者は非合理的なもの(概念の外にあるもの)を視野に入れていることである。この問題をセラーズの「所与の神話」やマグダウエルの「第二の自然」の問題と関連づける。本研究の最終目的は、西田・田辺における「第二の自然」の領域は具体的には歴史であり、論理の「歴史主義」的理解こそ彼らの目指したものであることを、ローティが標榜した「歴史主義」との関係で理解することにある。

4. 研究成果

2021年度は田辺元の哲学に焦点を当てて研究を進めてきた。本研究は、田辺元、西田幾多郎といった近代日本哲学者の論理の意味を、ネオプラグマティズムのヘーゲル理解を手がかりとして明らかにすることにあるので、論理という観点からの両哲学の内在的研究は不可欠である。田辺において、論理の理解は、彼の歴史主義という独特の立場と結びついており、これが同時に田辺のヘーゲル理解の核となる考え方なので、田辺の言う歴史主義の意味を明らかにする研究を行った。その研究は、(1)彼の歴史主義の立場の生成の仕方を解明することと、(2)その哲学的・思想史の意味を理解すること、との二つの観点からなされ、(1)の研究においては、田辺の歴史主義という発想と彼の国家論・時間論との結びつきが明らかにされ、(2)の研究においては、多様な意味合いでこれまで語られてきた歴史主義のあり方を整理し、それとの関係で田辺の歴史主義のもつ意味と可能性とを明らかにした。(1)の成果は、論文「国家・時間・歴史主義」として、(2)の成果は「歴史主義としての田辺哲学」として、それぞれ発表した。また、その他にも、「実存協同」という概念に代表される田辺の共同体をめぐる思索を歴史的に整理し、その可能性を探る研究や、田辺のスピノザ理解の意味を明らかにする研究も行った。ヘーゲル理解においてスピノザ哲学は重要な意味を持つので、本研究の目的にとって後者の研究は特に重要な意味をもつと考えられる。

2022年度は、2021年度に引き続いて、西田幾多郎と田辺元の哲学の内在的な理解に焦点を当てて研究を進めてきた。本研究は、田辺元、西田幾多郎といった近代日本哲学者の論理の意味を、ネオプラグマティズムのヘーゲル理解を手がかりとして明らかにすることにあるので、論理という観点からの両哲学のテキスト研究は不可欠となる。また、本研究はそれに基づいて、ヘーゲル哲学を間に置きながら、西田・田辺哲学とネオプラグマティズムの関係を理解することを目指すものである。ネオプラグマティストのヘーゲル理解を丹念に読み解く作業を行ってきた。こうした基礎的研究の成果発表は2023年度に発表される予定であるが、本研究に関わる2022年度の成果としては、後期田辺哲学の科学哲学の意味を明らかにしたものが挙げられる。相対性理論や量子論の成果をふまえて、独自の仕方で開催される田辺の科学哲学においては「微視的・局所的」や「存在の比論」という考え方が提唱され、それが後期田辺哲学の中心概念となっていくので、田辺の科学哲学の意味の解明は同時に彼の論理のあり方を具体的に捉えることを可能にする研究であると言えることができる。

2023年度は、田辺元のヘーゲル論とブランダムのヘーゲル論との比較検討を行った。具体的に言えば、田辺が1932年に刊行した『ヘーゲル哲学と弁証法』の中の「ヘーゲル判断論の理解」という論文を丹念に読み解き、そこでの田辺の立場が、論理的な判断がすでに社会的実践に媒介された営みであることを明らかにした。そして、そうした田辺の立場が「種の論理」の基本的立場に受け継がれていることも同時に論じた。こうした田辺のヘーゲル判断論理解が、文脈をまったく異にするとはいえず、ブランダムや彼に影響を与えたセラーズの立場と、発想において共通す

る点があることを明らかにした。田辺とネオ・プラグマティズムのヘーゲル論の比較検討は、2023年6月10日に開催された第3回日本哲学コンソーシアムにおいて「西田と田辺のヘーゲル理解の争点 分析哲学のヘーゲル論を手掛かりとして」と題して発表した。また、田辺のヘーゲル判断論の立場についての詳細な解釈は、「田辺元とヘーゲル - コブラの論理と判断の社会性」(『人文論叢』55巻2号、福岡大学、2023年)において論文として掲載した。

3年間の研究の成果は主に以下の2点に集約することができる。(1)思想的な関係性がまったく想定されていなかった、英米の分析哲学と近代日本の京都学派との内面的な関係性が、両者がヘーゲルに関心を示していること、さらにその足場としての行為・実践の立場に立脚していることに着目することで、明らかにされたことにある。具体的には、判断の社会性に注目するという意味において田辺とブランドムの立場には重なり合うところがあると言える。(2)分析哲学の明晰な問題理解ないしは問題設定を取り入れることで、田辺の複雑で抽象的な主張を具体的に理解する視点が獲得された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹花洋佑	4. 巻 18
2. 論文標題 田辺元のスピノザ理解 - 「限りの神」 (Deus quatenus) をめぐって -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『スピノザーナ』 (スピノザ協会年報)	6. 最初と最後の頁 44-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹花洋佑	4. 巻 607
2. 論文標題 国家・時間・歴史主義 - 前期の田辺哲学の最終局面 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹花洋佑	4. 巻 55巻2号
2. 論文標題 田辺元とヘーゲル - コブラの論理と判断の社会性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 297-330
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yosuke Takehana
2. 発表標題 The Beauty of Fragility; The Ontology of Oskar Becker and the Aesthetics of Shuzo Kuki and Masakazu Nakai
3. 学会等名 International Conference Feeling, Rationality, and Morality: East and West (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹花洋佑
2. 発表標題 他力という神秘 - 田辺元の科学哲学 -
3. 学会等名 明治大学文学部哲学専攻学術シンポジウム 科学と神秘
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹花洋佑
2. 発表標題 反復と偶然 - 九鬼時間論とシシュフォスの倫理 -
3. 学会等名 社会芸術学会2021/22大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹花洋佑
2. 発表標題 田辺元の共同体論の可能性
3. 学会等名 田辺元没後60周年記念シンポジウム (田辺元記念哲学会・求真会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹花洋佑
2. 発表標題 田辺元のスピノザ理解 「限りの神」(Deus quatenus)をめぐって
3. 学会等名 スピノザ協会第69回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹花洋佑
2. 発表標題 世界哲学の「世界」とは何か。あるいは何であるべきか。
3. 学会等名 明治大学文学部哲学専攻学術シンポジウム 世界哲学とは何か：「東アジア哲学」研究の意義と展望
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yosuke Takehana
2. 発表標題 Role and Virtue ; Focusing on Watsuji ' s Ethical Theory
3. 学会等名 International Society of East Asian Philosophy 2023 Conference in University of Edinburgh
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹花洋佑
2. 発表標題 西田と田辺のヘーゲル理解の争点 分析哲学のヘーゲル論を手掛かりとして
3. 学会等名 第3回日本哲学コンソーシアム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling、久保陽一、小田部胤久、深谷太清、前田義郎、竹花洋佑、守津 隆、植野公稔	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文屋秋栄	5. 総ページ数 464
3. 書名 新装版 シェリング著作集 第2巻 超越論的観念論の体系	

1. 著者名 東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター 和田博文・山辺春彦、竹花洋佑 他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 360
3. 書名 近現代日本思想史 「知」の巨人100人の200冊	

1. 著者名 廖欽彬、伊東 貴之、河合 一樹、山村 奨	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 886
3. 書名 東アジアにおける哲学の生成と発展	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------